

# 学園だより

地方競馬益金事業  
No. 12  
1979年3月31日発行  
財団法人  
中国四国酪農大学校  
電話 086766-3651



冬の第1牧場

## 根性と基本と連帯感で

### 難局を乗り切ろう

副校長 竹内 秀雄

卒業生の皆さん、お元気ですか。 蒜山地方の今年は、二、三年続いた暖冬とは違って、大山はもとより蒜山三座はまだまだ真白な雪に包まれています。しかし、学校附近は、四、五日前からの気温上昇で雪解けが始まり、今（三月七日）やっと草地の三分の二程度の土が顔を出して冬の衣を脱ぎ始めたところです。 今年は一月五日から雪が降り、最高は一米の積雪でありましたが、二月末日まで低温（マイナス十度前後）が続き、根雪となったもので、春の訪れるのはまだまだの感がします。

学校では、十四期生が家畜人工授精師の免許試験を終了し、三月二十八日の卒業式を前にして、卒業論文の纏めと、最後の試験に一生懸命頑張っています。十五期生は校外研修中であり、十六期生は、女子五名を含む二十八名の合格者を決定し、四月四日に入学式を行なう予定です。 牧場では、昨年度実施した緊急組

飼料増産総合対策事業によって、サイロ機械化体型を確立しました。本年度はこれをフルに活用した結果、低温気象にも拘らず、牛の栄養及び体調は頗る上々です。しかし全国的な牛乳の計画生産に同調して汰牛の淘汰を行なっています。又牛肉消費が増大している中で、乳用牛肉が全体の六十%を上廻り、今後も牛肉の供給不足と、価格の高騰等から乳用牛に大きな期待がかけられています。この実状に対応して、本年度から乳用雄子牛の哺育、育成、そして肥育に亘る技術の修得を教育の中に取り入れることとしました。その目的のため低コスト肥育牛生産促進事業によって、総事業費約二、六〇〇万円を投資し、哺育施設とスラリータンの新設、及び、旧学生寮を改築して肥育牛育成牛舎と、肥育牛舎を整備し、常時百二十頭を飼育する計画で、現在約六十頭の雄子牛を飼育しています。この様に、毎年新しい施設を整備することができるのは、卒業生の

#### 目次

根性と基本と連帯感で難局を乗り切ろう……………	1
酪農大学の近況……………	2
牧場の現況……………	3
第一牧場だより……………	3
第二牧場だより……………	4
卒業生からの便り……………	7
渡米研修を終えて……………	7
徳島にて……………	8
酪大日誌から……………	9
卒業生の就業状況……………	10
人の動き……………	11
第十四期卒業生名簿……………	11
第十五期生名簿……………	12

皆さんが築いてくれた尊い伝統と、各地で立派な酪農自営者として実績を挙げていることに対し、岡山県、地方競馬全国協会を初め、構成県及び、関係機関の深いご理解とご指導更に、物心両面に亘る強力なバックアップの賜と感謝しています。 日本酪農は、時代の変遷に伴ない、新しい問題を、次から次へと惹起しております。私は、現在この問題を乗り越えるために必要なものは、根性と基本と連帯感であると考えます。先づ、変動する社会、経済情勢の中で常に前向きの計画を樹て、一

歩一歩着実に完成する根性が大切で、ことが更に有利なこと等、人と人と。次いで、過剰投資の排除、共同の心の触れ合いから始まる連帯感。利用の推進等無駄を省く、所望、儲け問題の解決を早め、又、有利に展開するための経営、及び乳牛の健康のため、日光浴、乳飼比の最後、卒業生皆さんの組織作り、低減等、基本の原理と技術の積み重ね、又、又学校との繋がりを深めつつ、ねが大切です。

第三は、環境問題、自給飼料確保問題、政策等、一人の力では解決が難しいこと、及び連帯の力による

# 酪農大学校の近況

教育部長 植木 富士男

酪農大卒業生を初め関係者の皆様にはお元気で日夜酪農振興のために御努力いただいで居られることとお慶び申し上げます。

戦後わが国経済の流れは、生活物資の極度の不足時代、そして充足の時代による消費の拡大から今や過剰の時代へと僅か三十余年にして大きく移り変わり、酪農も又例外ではなくなりました。

牛乳の需給がアンバランスとなり、いわゆる自主調整による計画生産が開始され、酪農事情もきびしくなりました。

このような情勢下において本校は

内外実習を行っておりこれらの体験を生かし時代に即応できる自営者が

(表1) 牧場別飼育頭数

牧場別	品 種	成 牛				育 成 牛			合 計
		搾乳牛	乾乳牛	未経産牛	小計	12~18カ月	12カ月未満	小 計	
第1牧場	ホルスタイン	30	4	4	38	8	64 (51)	72 (51)	110 (51)
第2牧場	ジャージー	88	13	18	119	7	33 (5)	40 (5)	159 (5)
合 計		118	17	22	157	15	97 (56)	112 (56)	269 (56)

( ) 肥育牛 55.2.1 現在

昨年度は、粗飼料の一貫給与体系を確立するために緊急粗飼料増産総合対策事業を実施し、教育面並びに経営面に成果を博しておりますが、本年度は計画生産による経営を更に充実安定させるために、複合経営(肥育部門)を教育実習の一環として導入することになり、既に開始しております。

その事業名は「低コスト肥育牛生産促進事業」で、牛肉需要の増大に対処し、安価な牛肉を安定的に確保するとともに、高冷地における肉用牛肥育の実証を行うためホールフルアップサイレージの給与による低コスト肥育技術体系の確立を図る目的です。

この事業を教育に取り入れることにより学生の卒業後の経営に役立つものと考えております。事業実施場所は、第一牧場北寮の改築、北寮裏に哺育舎を新設、第二牧場三木ヶ原寮改築、その北側に牛衡器、堆肥舎更にスラリーストアーを並設しました。(表2)

今冬は近年にない大雪で、南国出身の学生は雪と戯れ迷スキーヤーが誕生いたしました。

昨秋は生憎あの猛威を振った台風二〇号の吹く最中に大特の免許試験が実施され、受験者全員が無事合格したことは感慨も今尚新しいものが

55.1.10 竣工

(表2)

施設又は機械名等	構造及び型式	数量	金 額
哺育舎新設	鉄骨ペン	134.4 m <sup>2</sup>	1
肥育舎(育成)改築	木造追込	215.2 m <sup>2</sup>	1
“(仕上)”	木造つなぎ	351.5 m <sup>2</sup>	1
スラリーストアー	ハワード	300 m <sup>3</sup>	1
牛 衡 器	鉄 骨	DS型	1
堆 肥 舎	鉄骨ブロック	33.1 m <sup>2</sup>	1
設計委託費			
			25,980,000 円

昭和五十四年度から家畜人工授精講習会の期間が三週間となり、本年度は一月一七日から二月四日まで実施され、二月一九日、二十日に修業試験が実施されますが、大特免許試験と同様に全員合格することを祈っております。

昭和五十四年度から家畜人工授精講習会の期間が三週間となり、本年度は一月一七日から二月四日まで実施され、二月一九日、二十日に修業試験が実施されますが、大特免許試験と同様に全員合格することを祈っております。

岡山県派伯農業実習生募集要項に

岡山県派伯農業実習生募集要項に

# 牧場の現況

## 第一牧場だより

基づいて、昭和五十四年度ブラジル 業後の両名の活躍が大いに囑望され  
 国派遣農業実習生二名（岡山県出身） 目的が達成されることを関係者一同  
 がブラジル国における農業実習や研 期待しているところだ。  
 習を通じ、農業に対する自信と意欲 以上近況をお知らせいたしました  
 を喚起し帰国後は農業の振興と農村 が、職員、学生が目的を一つにして  
 社会に貢献できる優れた後継者を育 酪農発展に向けて邁進しております  
 成確保し、併せて両国の友好親善に ので、卒業生並びに関係者皆様方  
 役立つため六カ月間渡伯し、現在一 御鞭撻を賜り、併せて御健闘と御発  
 生懸命実習に励んでおり、帰国し卒 展をお祈り申し上げる次第です。

立春を過ぎたとはいえ、ここ蒜山 スタイン種成牛三十八頭、育成牛二  
 地方では山も草地も一面根雪に覆わ 十一頭、計五十九頭のほか、本年度  
 れ、毎日寒い日が続いておりますが、 新たに、低コスト肥育牛生産促進  
 卒業生の皆さんは、益々お元気で大 事業が導入され、肥育素牛五十一頭  
 いにご活躍のこととお察し申し上げ （ホルスタイン種雄子牛十八頭、ジ  
 ます。 ヤーシー種雄子牛三十三頭）を旧北  
 さて、第一牧場の現況ですが、職 寮の改造牛舎と北側に隣接して新築  
 員は学校創立以来の大ベテラン常守 された哺育牛舎で飼養しています。  
 先生、北海道仕込の新道気鋭な大内 昭和五十五年二月一日現在のホル  
 先生、それに光畑の三名のほか、教 スタイン種の年令別構成は表2のよ  
 務課の有富、黒瀬両先生の応援によ うに、老令牛の更新、乳器、肢脚等  
 り、第十四期生の諸君と共に益々頑 に障害のあるものの淘汰等により牛  
 張っています。 群全体の若返りが目立っています。

◎ 乳牛の状況  
 現在第一牧場で飼養している乳牛 3のとおりに、三産以下の比較的若令  
 は、表1で示しているように、ホル の牛が大半を占めています。

### ◎ 生乳の生産状況

本年度は生乳の計画生産のため、 老令牛の積極的更新、更に、濃厚飼 料の節減等を実施するため、月別の 生乳生産状況は表4のように前年対 比で見ると、八月以降は減少傾向を 示しており、一日一頭当りの乳量に ついても可成り低率となっております。 しかし、例年に比較して各種の障害、

特に乳房炎の発生が極めて少なかっ たことは特筆すべきことだと思われ ます。

◎ 自給飼料の生産状況  
 本年度当初は、根雪もなく、二、 三月の降雪の少なかったことが幸い して牧草の萌芽も早く、成育が良好 であったので、放牧や青刈を早くか ら実施することができました。 圃場

作業にとって最も心配された台風が

表1. 乳牛の飼養状況 (55.2.1現在)

区 分	成 牛				育 成 牛			合 計
	搾乳牛	乾乳牛	未産 経牛	小 計	12~18カ月令	12カ月令未満	小 計	
雌	30	4	4	38	8	13	21	59
雄						⊕ 18 ⊙ 33	51	51
計	30	4	4	38	8	64	72	110

(注. 12カ月令未満の雄は肥育素牛で⊕はホルスタイン種、⊙はジャージー種)

表2. ホルスタイン種(雌)の年令別構成 (55.2.1現在)

出生年次	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	計
頭 数	1	1	3	5	6	8	6	5	11	13	59
比 率	1.7	1.7	5.1	8.5	10.1	13.5	10.2	8.5	18.7	22.0	100

表3. ホルスタイン種の産次別構成 (55.2.1現在)

産 次	1	2	3	4	5	6	7	計
頭 数	7	6	10	4	4	2	1	34
比 率	20.6	17.6	29.4	11.8	11.8	5.9	2.9	100

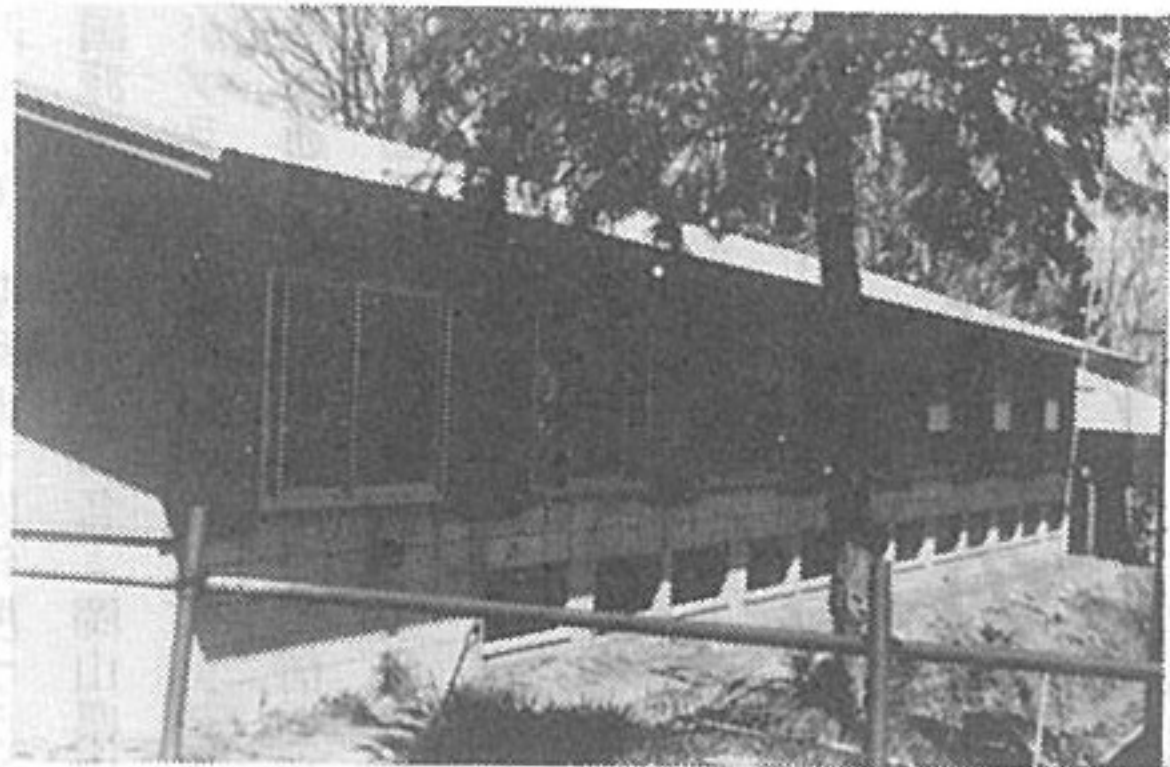
表4. 月別生乳生産状況

区 分		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
		総乳量	53年度	13,722	15,488	12,875	13,873	12,802	13,579	17,420	17,570	16,746	15,730	
	54年度	17,326	16,831	13,457	14,045	12,388	11,527	13,652	14,050	16,527	14,611			
	前年比	126	109	105	101	98	85	78	81	99	93			
一平均乳量 頭当り	53年度	18.3	20.0	17.2	18.8	17.6	19.1	20.4	21.3	19.3	19.3	19.4	18.8	19.1
	54年度	18.6	18.6	15.8	15.0	13.8	15.6	17.1	16.7	17.7	16.5			
	前年比	102	93	92	80	78	82	84	78	92	85			

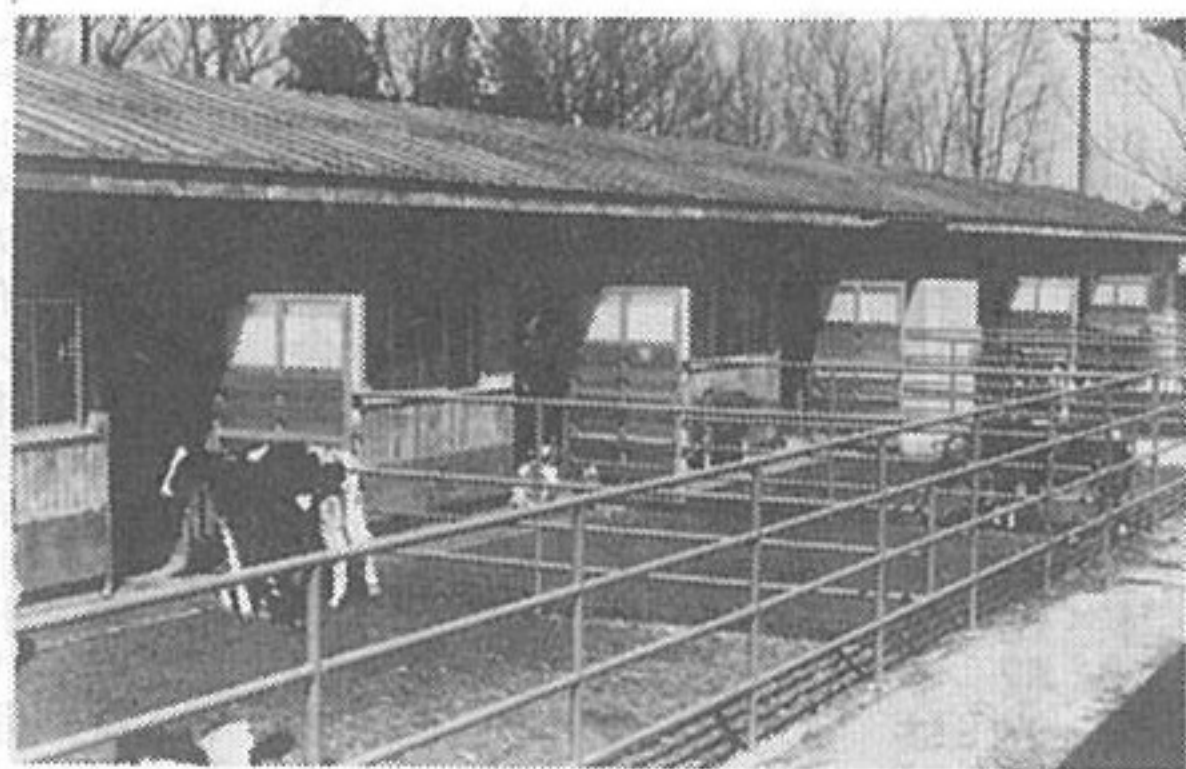
度々通過しましたが、被害も少なく、全般的に天候は稍々雨天の日が多かったが、作業に大きな支障をきたすこともなく、主な作業は計画どおり実施することができ、自給飼料の生産は例年にないい好成績をあげています。

◎ 放牧利用について

放牧専用草地三団地六・七haを利用して、乳牛の健康増進のため、運動と日光浴を目的として、四月十八日から十二月八日まで実日数一五三日、一日平均四〇・四頭、約三・七時間各牧区を輪換放牧しており、一日一頭当りの採食量は三五・四kg位と推定されます。本年度は放牧専用草地の一部を飼料畑に転換したため一・三ha面積が減少しています。



新設した乳オス哺育牛舎



旧学生寮を改造した乳オス育成牛舎

目下地力づくり、雑草対策を検討中です。

◎ 埋草利用について

例年どおり飼料畑を二毛作利用し、イタリアンライグラス二・八ha、トウモロコシ五・四ha作付し、更に混播牧草二・二haを利用して、タワサイロ二五t、気密サイロ大小あわせ一・二〇t、バンカーサイロ一〇八t、計二五三t貯蔵しており現在給与中です。

◎ 乾草利用について

放牧専用草地六・七haの掃除刈を主体とし、それに埋草以外の余剰牧草を極力利用して二・一t(三、八八〇梱包)確保しており、主として分娩後の牛及び育成牛に給与しています。

蒜山地方では、乾草調整の時期に降雨が多く、製品の品質がわるいのが難点です。

昭和五十二年度に造成したルーサン混播草地〇・五haを現在青刈利用していますが、年四回の青刈りができ、一〇a当り九一二〇kgの収量をあげています。ルーサンは牧草の女王といわれるように、乳牛の嗜好性も非常に良く産乳性に富んでいるようです。来年度は更に〇・六ha程度ルーサン混播草地を造成する予定です。

本年度中の自給飼料の総生産量は放牧利用分と飼料畑を加えて約一、三〇七tとなり、利用率八二・七%で、一〇a当りでは八、四八七kg、利用量七、〇一八kgとなっています。

以上第一牧場の近況についてお知らせします。最後に卒業生の皆さんのご健康と一層のご活躍をお祈りいたします。

第二牧場だより

第二牧場の近況として、昭和五十四年度の反省と昭和五十五年度の自給飼料生産計画をお知らせします。

昭和五十四年度の反省

生乳生産は二百九十七トンを生産していましたが、月々の生乳生産状況は第一表に示しているように、六月は八月が期待どりの乳量を得ることができず、一日一頭当りの産乳量も前年を下廻り、心配していました。しかし、後述のように秋から冬にかけての粗飼料が豊富になったことから、乳量の落ち込みが少く、年間の生乳生産量は計画をやや上廻り、三百七十七トンに達する見込みです。

また、同協会補助による草地更新改良事業も行いました。

更新改良事業も行いました。更新改良は造り成り一度も耕起せず荒廃の激しくなってきた七牧区と、過放牧のため芝地化してしまった九牧区の一部で計八・二ヘクタールを更新しました。自給飼料生産面で特筆すべきことは、まず、昭和五十三年度に完成した気密サイロを十分活用していることです。すなわち、一基にはイタリアンや混播牧草を詰め込み、もう一

牛販売は初妊牛の販売を計画していましたが、第四胃変位や乳熱、肢関節脱臼などの事故牛が多発したた

表 1. 月別自給飼料給与と生乳生産状況

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備 考
サイレージ コーン	30	12							21	3	22		気密サイロ "バンカー " "
" イタリアン										11	3	31	
" グラス							13	30	10	11	28		
放 牧 グラス	14	31	30	31	31	30	31	21	3				
青 刈 グラス					1	20							
" イタリアン							7	30	10				
延 搾 乳 頭 数	3,248	2,230	2,010	2,280	2,341	2,387	2,480	2,400	2,526	2,615	2,500		
生 産 乳 量	24,468	26,979	23,129	26,294	27,439	26,759	27,205	25,704	26,281	25,126	22,622	(25,000)	
1日1頭当り産乳量	10.4	12.0	11.5	11.5	11.7	11.2	11.0	10.7	10.4	9.6	9.0		
" 53年度	9.6	12.5	12.7	12.0	12.3	11.2	9.2	8.5	8.0	9.3	9.7		

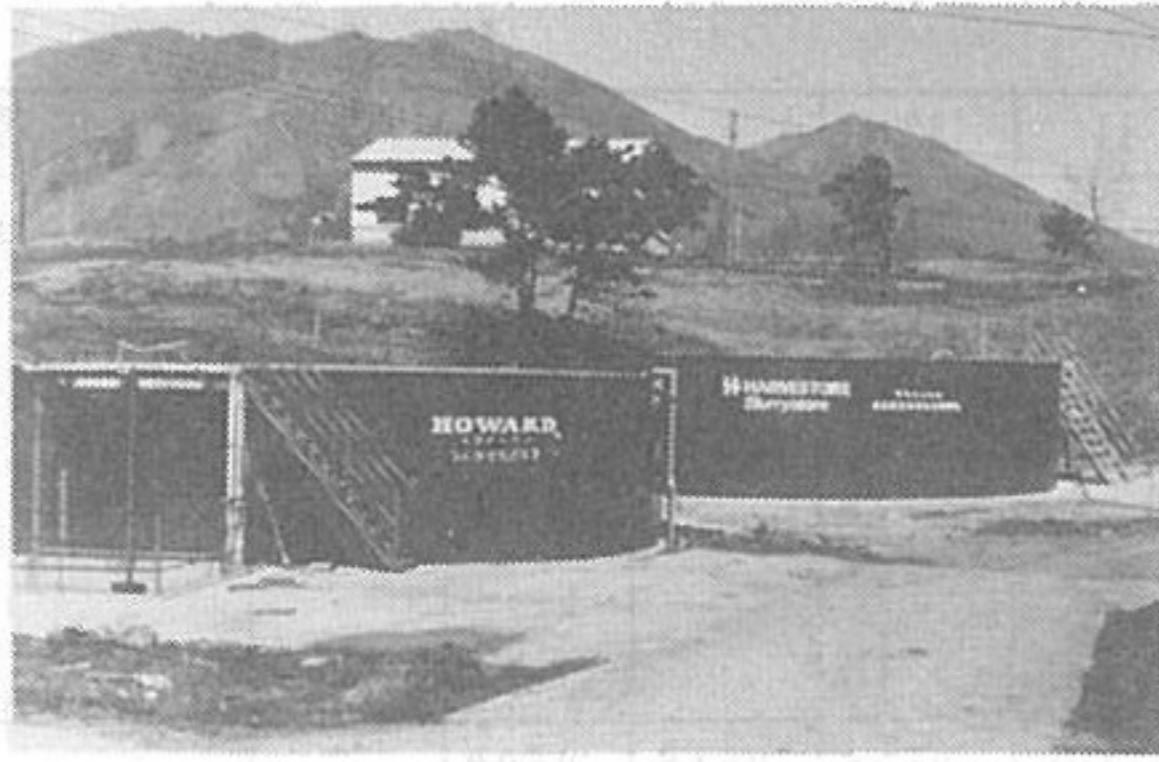
表 2. トウモロコシ作付計画

牧区	面積 ha	播 種	収 穫	施肥設計 Kg			施用量 Kg			種 子	除 草	備 考
				基 準	設計量	ケイアン	肥料名	10a 当り				
								基肥	追肥			
15	2.0	5月7日	9月 8~13日	N 22	26.8	16.8	A 819	20		スノーデント2	ロックス	鳥害防止
				P 12	26.4	17.8	NKC 3	20	20	10a 当り 3.5Kg	10a 当り 100g	スミチオン
				K 22	20.0	10.8	重焼燐	20		うね巾 90cm	ゲザプリム	クレゾール
							マグカル	100		株 間 30cm	10a 当り 150g	コールドール
							生ケイアン	1,500		1 株 2 粒	両者混合	
6(2)	5.0	5月 8~9日	9月 8~13日	N 22	26.8	16.8	A 819	20		同 上	同 上	同 上
				P 12	22.9	17.8	NKC 3	20	20			
				K 22	20.0	10.8	重焼燐	10				
							生ケイアン	1,500				

表 3. イタリアン麦作付計画

牧区	面積 ha	播 種	収 穫	基肥施肥設計Kg			施 用 量 Kg			種 (品 種)	備 考	
				基 準	設計量	ケイアン	肥料名	10 a 当り				
								春肥	追肥			基肥
2	2.0	8月下旬	11月中旬	N 20	25.0	11.2	A 819	40		40	テトリライト	自給飼料確保
				P 12	22.1	11.9	KNC 3	20	20	20	イタリアンコース	土壌改良
				K 20	16.0	7.2	尿 素	10		10	10a 当り	
							重焼燐			20	各 2.0 Kg	
							マグカル			80		
							炭カル			120		
							生ケイアン			1,000		
6(1) 11(2)	2.3	8月下旬	11月下旬	N 20	25.0	11.2	A 819	40		40		年内利用のみ
				P 12	27.5	11.9	NKC 3	20	20	20		
				K 20	16.0	7.2	尿 素	10		10	10a 当り	
							熔 燐			50	4.0 Kg	
							生ケイアン			1,000		

基にはトウモロコシを詰め込みました。いずれも非常に優秀なサイレージができました。つぎに、五十三年度に作付した極長期利用型イタリアン(マンモスA・エース)が大変よく生育し、サイレージや乾草や青刈り利用を行い、自給率が向上したことです。さらに、トウモロコシ跡地に短期利用型イタリアン(ワセアオバ)を作付し大変よい成績を上げたことです。天候に恵まれたこともあって、年内の生育が大変よく、青刈り給与やサイレージ利用することができ、十月〜十二月の乳量低下を防ぐことができました。この年内刈りイタリアンは初めての試みとして牛舎内のバンカーサイロに詰め込みましたが、極めて高水性のよい良質なサイレ



昭和54年度新設のスラリーストア

ーシができました。  
月別の自給飼料給与と生乳生産状況は表一のとおりです。  
昭和五十五年度の自給飼料生産計画  
第二牧場で飼養している牛(すべてジャージー種)の能力や頭数などから、生草生産目標は十アール当たり約三千八百キログラムとなります。この目標収量を上げるためには相当量の施肥をしなければなりません。しかし、牧場予算は大変苦しいうえに、肥料をはじめ、飼料、燃料などあらゆる資材が値上りしてきたために、例年以上に金肥を節減し、しかも収量を上げるような計画を立てなければなりません。  
一、トウモロコシ作付計画

作付面積は七ヘクタールで、五月上旬に播種し九月上旬中旬にサイレージ調整する計画です。例年より生育日数を延長し、サイレージの品質向上を図っています。第二牧場では「カラス公害」に苦慮しています。そこで、その対策としてスミチオン法、コールタール法、クレゾール法などで鳥害防除を行ない、効果を比較検討する考えであります。十アール当りの目標数量は五千キログラムとしていきます。(表二)  
二、イタリアン、青刈ムギ作付計画  
老朽牧区の一部二ヘクタールを更新し、極長期利用を目的としてイタリアンエースとテトリライトを作付し、昭和五十六年度のトウモロコシ作付予定地の一部二・三ヘクタールには年内利用を目的としてイタリアンコンモンの作付を計画しています。いづれも八月下旬に播種し、十一月中下旬に収穫する予定で、十アール当り収量三千キログラムを目標としています。(表三)  
三、永年草地更新計画  
トウモロコシの作付地をオーチャードグラスを主体とした混播牧草地に更新する計画です。播種期が遅れることから、年内利用はあまり望めず、昭和五十六年度以降の自給飼料

表 4. 永年草地更新計画

牧区	面積 ha	播 種	収 穫	施 肥 設 計 Kg			施 用 量 Kg		種 子		備 考
				基 準	設 計 量	ケイフン	肥料名	10a当り 基 肥	品 種	10a当り	
15	2.0	9月下旬	年内1回 放 牧	N 6	14.0	11.2	A 8 1 9	20	オーチャードアオナミ	3.5	土壌改良 自給飼料 確保 (56年度)
				P 8	13.5	11.9	マグカル	200	テトリライト	2.0	
				K 6	10.0	7.2	炭カル 生ケイフン	150 1,000	カリフォルニアラジノ イタリアンエース	0.3 0.3	
6(2)	5.0	10月上旬	年内1回 放 牧	N 6	14.0	11.2	A 8 1 9	20	同 上	同 上	同 上
				P 8	13.5	11.9	マグカル	100			
				K 6	10.0	7.2	炭カル 生ケイフン	150 1,000			

確保を目的としています。(表四) 以上の作付計画で特に注目すべき点は、施肥設計にあるように、ケイフンを大量に使用して金肥の節減を点は、施肥設計に力を入れていることとです。

表 5. 永年草地管理計画

牧区	面積 ha	追 播	収 穫	施 肥 設 計 Kg			施 用 量 Kg			種 子		
				基 準	設 計 量	ケイフン	肥料名	10 a 当り			品 種	10a当り
								春 肥	追 肥	秋 肥		
一般	46.2	8月下旬 15.9 ha	4~5月	N 42	19.2	-	A 8 1 9	40		20	オーチャードアオナミ	1.5
			7 月	P 16	4.8	-	NKC 3		20		イタリアンマンモスA	1.0
			9 月 (放牧)	K 42	11.6	-	尿 素	10	56		カリフォルニアラジノ	0.5
金肥 節減	5.7	-	5 月	N 42	29.5	13.9	A 8 1 9	20			-	-
			7 月	P 16	20.8	18.2	NKC 3		20			
			9 月 (放牧)	K 42	20.5	14.5	尿 素 乾ケイフン 生ケイフン	10 130	65		1,000	

四、永年草地管理計画

永年草地については、採草地は例年どおり一番草はサイレーシ、二番草は乾草、三番草は放牧利用と考え特に一番草の増収を図っています。放牧地は制限放牧による草生維持を計画しています。

なお、採草地の一部では地力維持を図るとともに、金肥の節減を兼ねケイフンの散布を計画しています。

(表五)

五、ギシギシ防除対策

御承知のように、第二牧場ではギシギシが非常に繁茂し、自給飼料の確保や収穫作業能率の上で大へん大きな阻害要因となっています。その対策として、昭和五十三年度からアーシランの全面散布やスポット処理を行って、ギシギシ防除の方向をつかむことができました。すなわち、初回のアーシラン散布でギシギシの茎葉は枯死するが、そのあとから種子が発芽して増加すること、根が枯死しないうちに耕起すると、根と種子から発芽することなどがわかりました。さらに、アーシランの低濃度液では牧草への被害は少いことがわかりました。したがって、ギシギシが密生している草地には、二〜三年繰返してアーシランの低濃度液の全面散布を行い、牧草種

子を追播してギシギシの根絶と草生の回復を図ることが最善の方法であると思います。なお、一部草地は追播して草生の回復を図る計画です。

昭和五十五年度については、春(四〜六月)と秋(八〜十月)の二回全面散布

を行い、春処理後に生じた実生のギシギシを秋処理で枯殺する計画を立てています。なお、一部草地は追播して草生の回復を図る計画です。

復を図る計画です。

(第二牧場 森次記)

卒業生からの便り

渡米研修を終えて

第九期卒業生 福井孝士

(岡山県久米郡柵原町)

私がアメリカへ研修を求めた目的は、まず第一に、自分自身の力をためす為であり、第二に少しでも進んだ酪農技術をつかんで帰る為でした。私が研修した場所は、アメリカの東海岸に位置した、サウスカロライナ州とフロリダ州です。サウスカロライナ州の農場は、ジャージー種ばかりの農場で搾乳牛三百頭の中規模農場で、建物や搾乳機械は古くほとんどが二十年位前のものばかりで、

現在日本に入っているものとはほぼ同じ機械です。私は、日本の搾乳機械とアメリカのものでは、十年以上の開きがあることをこの目で見たように思いました。

私がこの農場で研修した事は、酪農経営のすべての事と、人工授精、病

この農場の進んでいた面といえば「チャレンジ・フィードング」を三年前から始めていた様子で、私が日本に帰ってから「チャレンジ・フィードング」が日本でも叫ばれ、本に書かれていました。

この農場のすべての機械は、とても長く使用する事が出来るのですが、その理由は、機械管理を十分にしているからと言えるでしょう。使用前の点検、使用後の洗浄、定期的な交換する部品、オイル、そして無理のない方法での使用、これが機械を長

期間使用する方法だと思いました。現にこの農場では、二十五年前の単キ筒ガソリンエンジントラクターが力強く働いていました。

私は、この農場で二年間研修をしました。この農場では、二年前の単キ筒ガソリンエンジントラクターが力強く働いていました。

私は、この農場で二年間研修をしました。この農場では、二年前の単キ筒ガソリンエンジントラクターが力強く働いていました。

です。講入飼料百パーセントで乳量だけで経営を維持しています。ですから、乳牛もホルスタイン種、ジャージー種、ガンジー種等で、日本の酪酪農と似ている点があるように思いました。しかし、講入飼料の中心は、ジュース粕で、それにビートパルプ、ヘイキューブ、産乳飼料が含まれていて、酪酪農とは考えていないようです。又、人工授精をしても授胎するし、やはり新しい飼料給与方法であるのではないかと考えます。

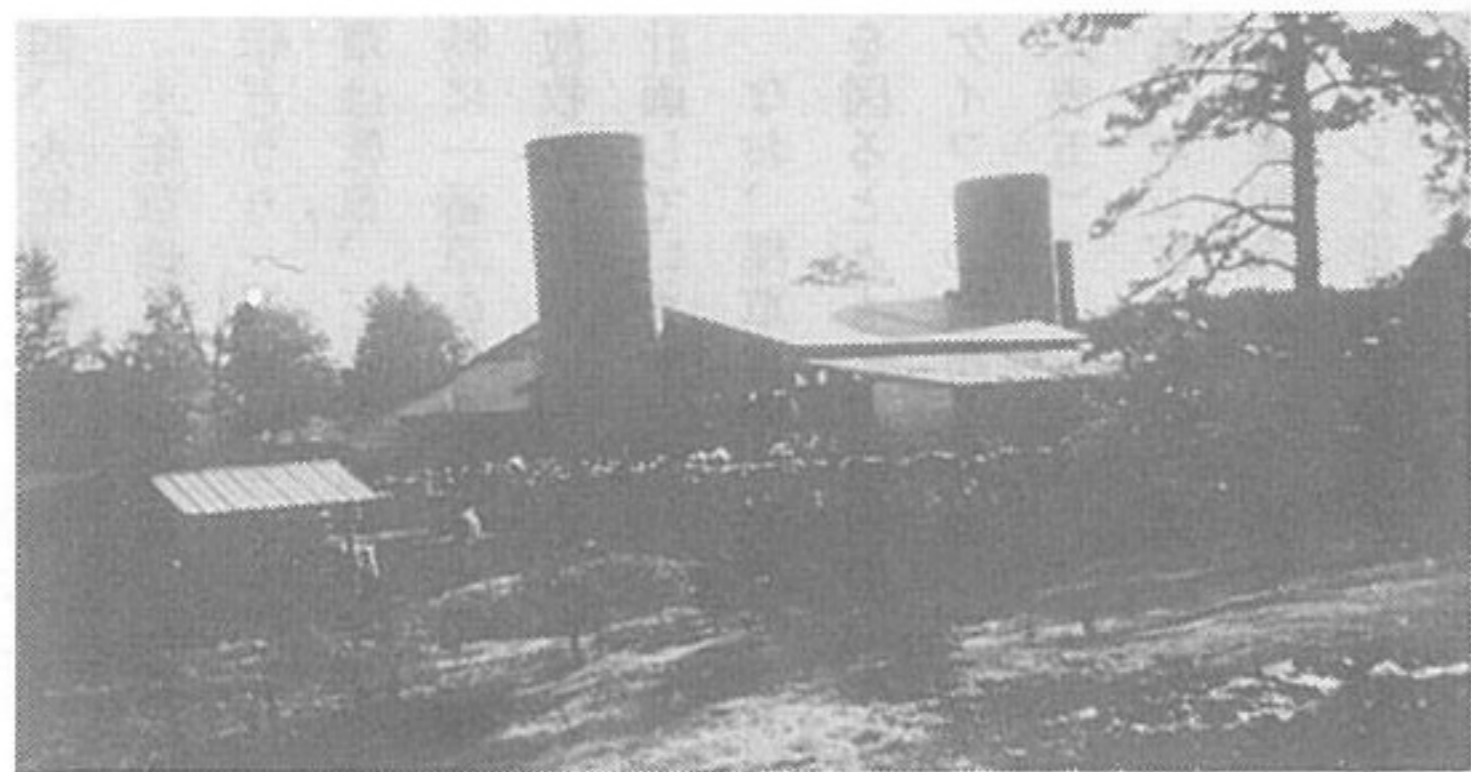
搾乳には、朝の部と夜の部との搾乳者がいて、朝の部は、夕方まで、夜の部は朝まで搾乳をします。搾乳機械もオートマチック式のものを採用し、これによって搾乳の能率を高め

サンシャイン・ステイツと言うキヤッチフレーズが本当にピッタリと来るこの州は、人々もほがらかで、人なつこささえ感じました。

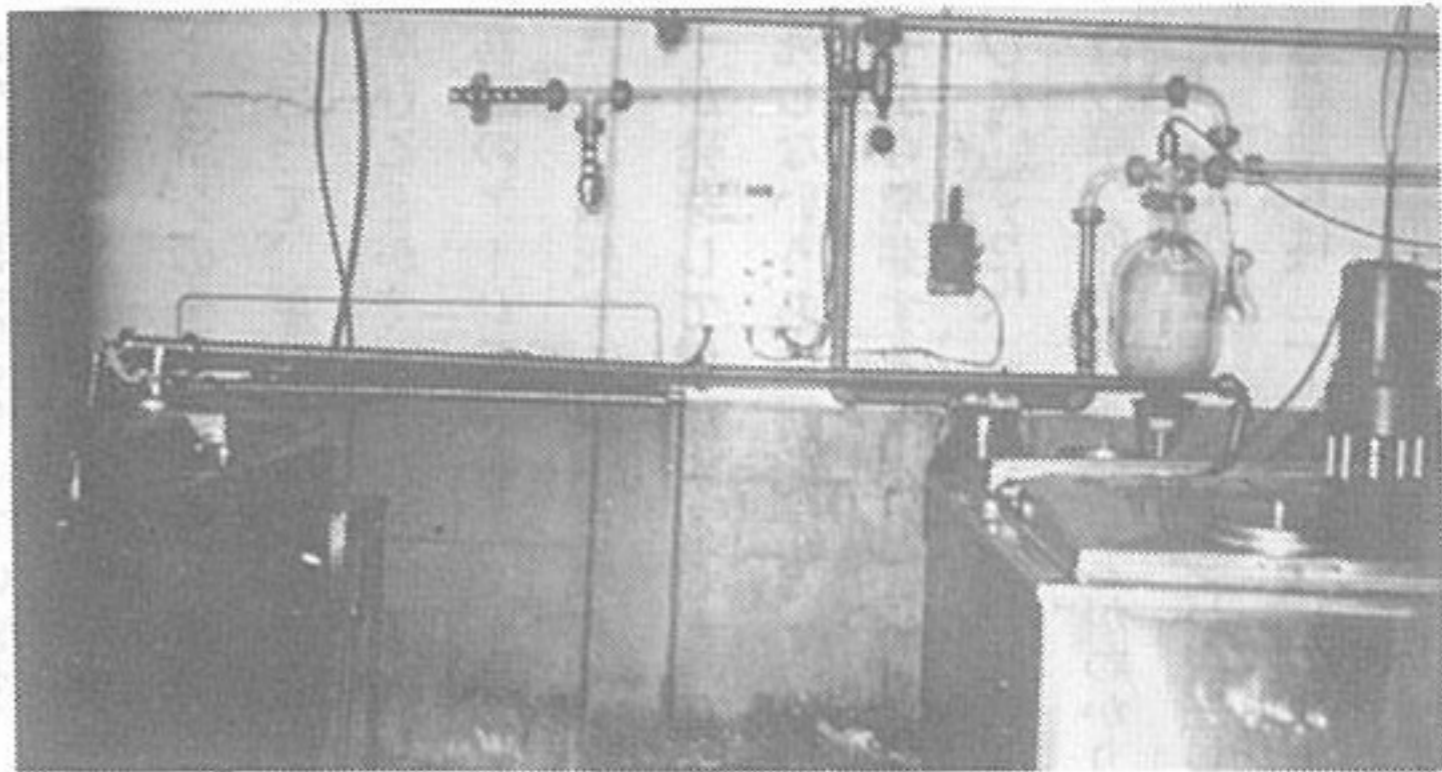
研修した農場は、搾乳牛千二百頭位の大型農場です。この農場の大きなちがいは、粗飼料を作らない事



20mのタワーサイロ (サウスカロライナ)



20年以上前に建てられたフラットバーン



20年前のミルクシステム



バンガーサイロからのサイレージ取出し

# 徳島にて

第十三期卒業生 兼 松 裕 子

(徳島県板野郡上板町)

る様にしておりましたが、オートマチックの機械にたよりすぎて、乳房炎牛が多かった様に思います。このシステムはこの農場では十年位前に導入したようですが、日本に帰って搾乳機械に関するパンフレットを見た時に、このシステムが導入されていきました。このフロリダの大農場の大きな問題は人の移動がはげしい事で私がいた一年間の間に十人以上の人が出入りして働いていました。

私は、これらの二つの対象的な農場で学び、私自身がこれからの我が家の経営を考えていかなければならないと思いました。

私は、自営に入って日も浅く、多くの人々に支えていただかなければいけないこともあると思いますが、その時にはよろしくお願い致します。

穏やかな暖たかさが、日を増すにつれ、やっと南国徳島らしい季節になりました。このお便りを書きはじめました。このお便りを書き事になり、まだまだ学生気分が残っている私は「もう卒業して一年がたったのだ」という実感と同時にちよびり、恐いような気分になったのです。と言うのも、我家に帰り、両親の手伝い程度にしかなくなって一年が過ぎてしまったようだからです。こんな私ですが現在の様子や、酪大での想い出を書いてみようと思います。

すっかり徳島に振り返り生活をしているのですが、時折、ふと口に出す岡山弁がとても懐かしく感じられ、酪農誌、農業新聞などで先輩の方々の活躍を目にし、また聞き慣れた地名を目にすると何となく嬉しくなり、全く知らない人であっても身近に感じたりする事がしばしばあります。同じ酪農を通じて語り合える事などとてもすばらしい事だと思っています。私は農家の長女として、小さな頃より牛を見て育ちました。しかし、

や友情など本当に学んだ点が多かったように思われます。時々友人より連絡をもらう都度、楽しかった酪大での生活に懐かしさを感じ、私達の気持ちは学生時代へと返って話は尽きないのです。今、ふり返ってみるといろいろな事を見て、学び、吸収した充実された最も大切な時であったように思われます。では、この辺で我家の経営を紹介



S 53年に新築した50頭牛舎



します。

50頭搾乳牛舎を53年12月建設、機械化による作業、現在成牛40頭（搾乳牛31頭、乾乳牛5頭、未經産牛4頭）、育成牛25頭を飼養し、現在増頭段階です。耕作面積は、草地11ha水田11ha、借地70a、作付はトウモロコシ、ソルゴー、イタリアン、麦など、通年サイレーシ形式で行なっています。50t気密サイロ2基のため作付の回転を早くトウモロコシの2期作とソルゴーをサイレーシ調整しています。私の町は徳島県北部に位置し、吉野川にそう平野の水田酪農地帯です。西南暖地型気候のため夏場の乳牛管理が難かしく、た、乳量制限が厳しく頭数増加も出来ず悩まされています。昨年度は残念なことに事故牛も多く思うように経営が運びませんでした。今年にはいり冬場の比較的暇な時を利用して、一月より、県畜産試験場（車で5分）にて研修をしています。もう一度、初心に返る意味で徳島県での酪農を把握すること、我家に合った牛作り、管理を勉強し、また人工授精もできるよう研修しています。現在、検定牛舎にて、搾乳、飼養、授精を主に勉強しています。

作業服姿と白い長ぐつのは、牛

と一緒に、豊かで楽しい酪農を夢

めています。その反面、疲れてふと机に向かうと21才の女に返り、まわりの大学生や勤めている彼女達と一緒に席したりするのですが、不安な気持ちになる時もあるのです。私に一生やっていけるのだろうか……。と、悩む事も多いのです。でもこの便りを書き進めるに従い、私には、同じ酪農に夢を拓し、各地で努力されている先輩、友達、後輩のたくさんの方の姿が浮んできました。まだ、私にとって難関はたくさんあると思えますが、今の経営を両親と共に、一歩ずつ前進させ、安定経営に軌道を乗せるよう努力したいと思っています。もっと視野を広げ、一生の仕事として勉強し、何十年か後には、牛飼いと自信の持てる経営にしたいと思っています。

今、牛舎のまわりに春の花が咲きはじめています。また忙しい季節がやって来ましたが、皆様のご健康とご活躍をお祈りいたします。

### 酪大日誌から

○四月五日 第十五期生四十二名（うち女子七名）が将来の酪農経営を志して入学した。

○六月五日 第十五期生三チーム、第十四期生（校内研修生）、職員五チームにより第一回校内球技大会（ソフトボール）を開催。職員チームは惜しくも準優勝であった。

○七月十日～十一日 恒例の乳牛動態調査を小雨の中で実施した。酪農を志す者として乳牛の生態を知る

○七月十五日 岡山県の人事異動により、花房清人校長（岡山県農林部長）が辞任され、新校長に三宅茂岡山県農林部長が就任された。

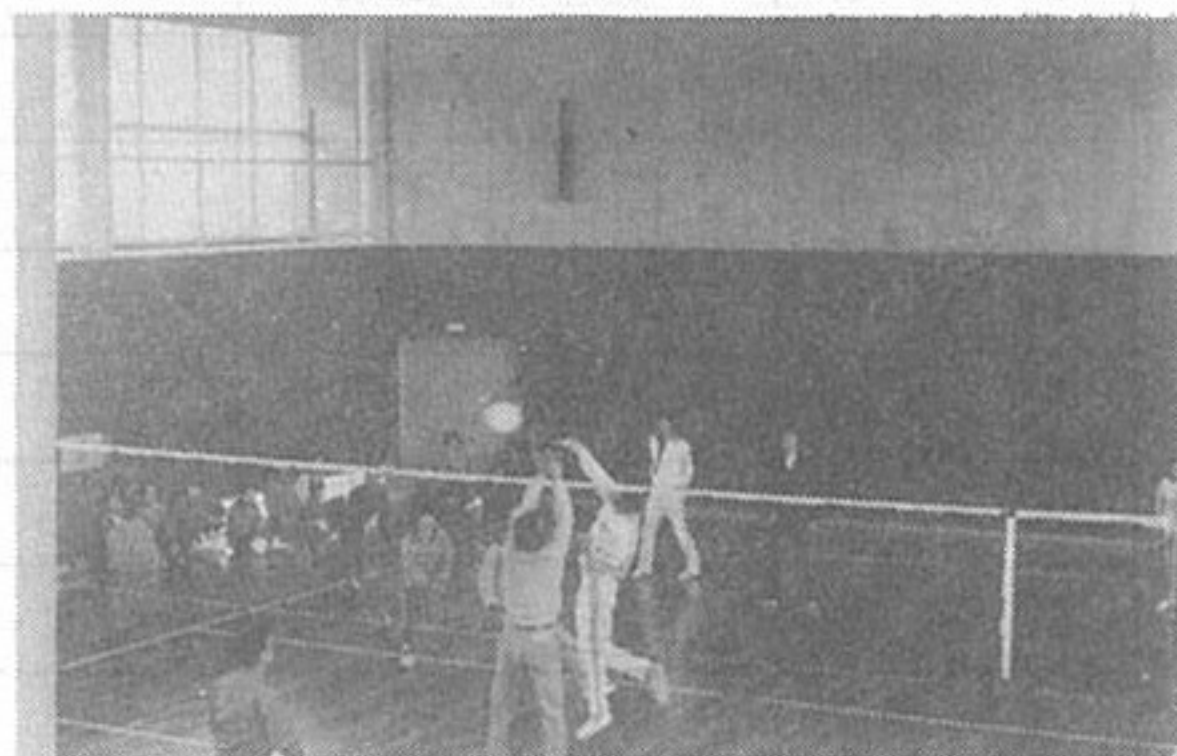
○八月八日 第二回校内球技大会（ソフトボール）を、新しい校内研修生を迎えて開催した。

○九月二十八日 第十五期生前期終業式を行い、四十二名がそれぞれの校外実務研修先へ向った。

牧橋張り



校内球技大会



校し、後期就学に入った。

○十月八日 第三回校内球技大会（バレーボール）を開催。

○十月十八～十九日 農耕用大型トラクター及びけん引運転免許試験を昨年と同様に蒜山高校グラウンドで受け、折りからの台風二十号の接近で激しい風雨の最悪の状態にもかかわらず、全員が合格した。

○蒜山体協主催の秋季バレーボールリーグ大会に、揃いのユニホームを新調して、学生・職員の混合チームで参加したが、戦果は不振に終わった。

○十二月七日 恒例になった校内球技大会を第四回目を迎えて開催。

○一月十七日～二十四日 家畜改良増殖法の一部が改正されて最初の



お揃いのユニホームで……



家畜人工授精講習会が開催され、  
 二月十九、二十日の両日に修業試  
 験が行われたが、残念ながら全員  
 合格には至らなかった。  
 ○二月六日 五十五年度の推せん入  
 学試験を実施したが、受験者は二  
 十七名とやや淋しかった。  
 ○二月七日 今年度最後の第五回校  
 内球技大会を開催。  
 ○三月二十八日 第十四期生三十二  
 名が、酪農経営士となって元気に  
 我が学舎を巣立って行く。  
 (教務課 有富記)

## 卒業生の就業状況

昭和五十四年度に本校の卒業生（  
 岡山県立第一期から財団法人第十三  
 期まで）を対象に、往復ハガキによ  
 り、卒業後の就業状況を調査しまし  
 たのでその結果をお知らせします。  
 調査依頼数（卒業生数）及びこれ  
 の回答状況は、岡山県立酪農大学校  
 一〜四期では調査依頼数八十四名、  
 回答者数三十一名（回答率三十六・  
 九%）、財団法人中国四国酪農大学  
 校一〜十三期では調査依頼数四百十  
 二名、回答者数百八十四名（回答率  
 四十四・七%）、合計四百九十六名  
 の依頼数に対し、回答数二百十五名  
 （四十三・三%）と、やや低調に終  
 りました。  
 回答のあった二百十五名の酪農就  
 業状況は次のとおりです。  
 今回の調査に対し、御回答をいた  
 だきました皆様には、お忙がしいと

### 1. 酪農就業状況

区 分	項 目	人 数	割 合	備 考
	酪 農 就 業 者	156人	72.6%	
	非 "	59	27.4	
	計	215	100	

### 2. 酪農従事者の専業・兼業の内訳

区 分	項 目	人 数	割 合	備 考
	酪 農 専 業	121人	77.6%	
	兼 業	35	22.4	
	計	156	100	

### 3. 兼業酪農家の内訳

区 分	項 目	人 数	割 合	備 考
	酪農+農 林 業	7人	20.0%	
	酪農+酪農関係勤務	20	57.1	
	酪農+そ の 他	8	22.9	
	計	35	100	

### 4. 非酪農従事者の内訳

区 分	項 目	人 数	割 合	備 考
	酪 農 関 係 就 職	26人	44.1%	牧場等を含む
	農 林 業	3	5.1	
	そ の 他	30	50.8	
	計	59	100	

### 5. 酪農従事者の飼養規模別内訳

頭数別	項 目	人 数	割 合	備 考
0 ~ 9	頭	13人	8.3%	
10 ~ 19		29	18.6	
20 ~ 29		30	19.3	
30 ~ 39		28	17.9	
40 ~ 49		22	14.1	
50 ~ 59		19	12.2	
60 ~ 69		7	4.5	
70 ~ 79		2	1.3	
80 ~ 89		0	0	
90 ~ 99		1	0.6	
100 ~ 149		4	2.6	
150 ~ 200		1	0.6	
	計	156	100	



# 人の動き

昭和五十四年度、岡山県定期人事異動が四月一日に発令され、諸先生の移動がありました。

転出者

(校長) 花房 清人

岡山県出納長

(昭和五十四年七月十五日付)

(次長) 木本 肇

岡山県畜産公社事務局長

(総務部長) 野島 真純

岡山県勝山保健所総務課長

(教務課長) 津高 馨

岡山県津山地方振興局農林

事業部農業振興課畜産係主

任

(第一牧場技師) 柴田 範彦

岡山県農林部畜産課技師

岡山県農林部畜産課技師

現職員名簿

(昭和五十五年一月一日現在)

校長 三宅 茂

副校長 竹内 秀雄

次長 天野 毅

(総務部)

部長 河野 俊治

主任 柴田 光政

主事 堀 義和

主事 津田 清子  
 運転技術員 池田 富幸  
 調理技術員 戸田 道子  
 樋口 知子

(教育部)

部長 植木 富士男

教務課

課長 有富 敬典

技師 黒瀬 浩平

第一牧場

場長 光畑 稔

技師 大内 紀章

主任助手 常守 実

第二牧場

場長 森次 興士

主任 小福田 満郎

技師 早瀬 文繁

助手 三牧 孝徳

磯田 博

## 編集後記

卒業生の皆さん、お元気で活躍のことと思います。

今回の学園便りは、昭和五十四年度国庫補助事業により設置した乳オス肥育施設を中心に、年々整備されつつある施設の概況と学校の近況をお知らせしました。

竹内副校長、常守助手の両名の方が、五十五年三月末をもって退職されます。

竹内副校長は、昭和五十二年四月に次長として着任され、翌五十三年四月から副校長として本校の施設整備、運営改善に努力され、した。退職後は、岡山県畜産会コンサルタントとして今後も活躍されることとなっております。

常守助手は、昭和四十一年四月から今日までの十四年間にわたり、教育関係、牧場関係において献身的に尽されました。

ご両名の方の、今後のご健斗をお祈りいたします。

学園と卒業生の皆さんとの連けいを深めるため、皆さんからのお便り、ご寄稿を期待します。



## 昭和五十四年度 第十四期卒業生名簿